

加藤 宏 文 著

『高等  
学校 私の国語教室—主題単元学習の構築—』

本書の著者加藤宏文先生は自らの実践を省察する観点を次のように示されている。

「一つの代名詞の指示内容を、とらえる。いくつかの形式段落に、分ける。主人公の心情の最もよく表われている箇所を、抜き出す。私は、これらの言語活動止まりの学習で、事足れりとしてはこなかったか。それは、すでにあり、決定されたものを、検索する力の練成である。その成果は、技能や知識や態度を、量として集積したか否かで、測られてはこなかったか。」

(一ページ)

加藤先生は、右のような国語学習を「技能学習」ととらえ、それは基礎に置きながら、それを突き抜けた主体的な「価値学習」に深めていく方法論を「主題単元学習」に求めて来られた。加藤先生が用いる「主題」とは、教材群を共通して貫いているテーマを指すにとどまらず、教材による学習を通して生徒の中に芽生える「問題意識」であり、社会を生きぬき、未来を切り開く「生きる力」を生むものである。本書

に示されている、三年間の十五にわたる主題単元学習の実践は、終始一貫して生徒一

人一人の認識力を深め、「生きる力」を育てようとしたものに他ならない。一単元自己をみつめる／一単元 青春とは、何か／三単元 ことばと文化／四単元 生と死／五単元 風刺には、どんな力があるか(以上第一学年)／六単元 人は、なぜ旅をするのか／七単元 発想を変えたら、何が見えるか／八単元 ことばの美しさとは、何か／九単元 文明は、何をもたらしたか／一〇単元 文学を生み出すとは、何か(以上第二学年)／一一単元 ことばにとって、沈黙とは何か／一二単元 私たちにとって、自然とは何か／一三単元 今、なぜ、愛が求められるのか／一四単元 歴史としくみの中を生きぬこう／一五単元 私の卒業作品(以上第三学年)

(本書にはこれらの単元がすべて収められているわけではない。)

これらの主題単元学習の一つ一つが、指導者のたゆまぬ教材開発の努力に支えられていることは言うまでもない。主題単元学習を成立させる主要な条件がここに示されている。また、主題単元学習が批評される「指導者によって設定された「主題」によ

り、学習の過程や方向が決められてしま  
う」(二五五ページ)という問題点に関し  
ても、指導者が生徒の自己表現に真摯に  
「聞きひたり」、誠実に導き、「評価」し  
ようとする姿勢のなかに、解決の方向が示  
唆されている。ひとりよがりとは程遠い、  
敬虔な態度によって紡ぎだされた主題単元  
学習は、加藤先生のお人柄をにじませたも  
のとなっている。更に、主題単元学習を効  
果的に深める方法として、教師と生徒間、

生徒同士の相互批評があることが実践を通  
して指摘されており、興味深い。

主題単元学習という、確かな価値と魅力  
があると思われる実践理論を追求してい  
くうえで本書は様々な豊かな示唆を与えてく  
れるものである。

(A5判二七九ページ昭和六十三年六月

三十日、右文書院刊二、五〇〇円)

(山元 悦子)